

國學院大學學術情報リポジトリ

Activities

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/1652

〔古代史部会活動状況〕

本年度の古代史部会は、博士課程前期四名・後期二名の計六名で研究活動をおこなっている。

佐藤長門先生の演習では『九曆』、田中史生先生の演習では『入唐五家伝』を取り上げ、その校訂と講読を通して平安時代の政務儀礼および密教僧の動向を検討している。また佐藤信先生の講義では『類聚三代格』を講読しており、先生の幅広い見識を積極的に吸収しつつ、格の検討を通じて古代日本の社会的様相の解明に取り組んでいる。さらに石上英一先生の講義では、前近代奄美諸島関係画像史料を素材として史料学を教えていただいている。

各演習・講義に加え、毎週月曜には学位申請論文や論文投稿の準備などを中心とする研究会を開催し、活発な議論を繰り広げている。また月一回、古記録を読解する基礎力を養うことを目的として、有志の院生が集い、『権記』を講読している。

夏の巡見旅行は八月二十九・三十一日に秋田・山形両県で実施した。当地の大学および自治体関係者のご厚意により、古代東北地方の遺跡や出土文字資料を見し、官衙等のあり方についての理解を深めた。合宿は九月十九・二十日に神奈川県三浦市のサンポートみさきにおいて実施し、各自の研究成果を報告した。

本年度も所属院生が国史学会や歴史学研究会卒論報告会など学内外の学会で幾度か研究報告をおこなう機会をいただいた。

今後も積極的に院生同士で切磋琢磨し、さらには学外の研究者との交流を深め、学内外の学会・研究会での研究報告、学術雑誌に論文を投稿するなど、研究活動をいっそう盛んにするよう努めたい。

(西村健太郎)

〔中世史部会活動状況〕

今年度の中世史部会は、千々和到先生・池上裕子先生・榎原雅治先生・矢部健太郎先生・近藤好和先生、以上五名の先生方よりご指導を頂いた。

千々和先生の演習では、昨年に引き続き本学図書館所蔵の「久我家文書」を講読し、主に平頼盛の遺領である池大納言家領について検討を行った。担当文書を決めての報告はもちろん、古文書を見し刊本との比較を行うなどの調査活動も展開した。また、夏には山名隆弘氏のご厚意により、福島県いわき市周辺の史跡や相馬の野馬追の見学も行い、東北の中世史への理解を深めた。また、各自の研究報告も行われている。

池上先生の講義では『戦国遺文 後北条氏編』を講読している。戦国期東国の在地社会においての政治・経済活動など、多岐にわたる側面から考察が加えられ、討論が行われた。夏には東京都青梅市の三田氏関連史跡等を巡見し、調査の手法を学ぶと共に現代に残る中世の石造物・古文書等にふれた。

榎原先生の講義では『満濟准后日記』の講読を行っている。

永享6年の記事を中心に、背景となる室町時代の政治動向や社会情勢、遣明船の派遣などといった対外関係における幕府の事業についての多様な議論が展開された。

矢部先生の演習ではゼミ生各自の研究報告に加えて、『豊臣秀吉文書集』を輪読している。今年度は天正9年段階の文書を中心に読み進め、織田政権下の政策や秀吉の中国地方での活動について、活発に討論が行われた。

また、『国家珍宝帳』を読み解き、古代の刀剣や弓矢をはじめとした武器について考察する、近藤先生の講義も開講されている。

以上、簡単ではあるが各演習・講義の内容や活動状況を記した。今年度は院生の投稿論文の雑誌掲載に加えて、学内外の研究会での報告が数多く行われた上、博士論文提出者も二名おり、全体的に良好な研究環境が維持できた印象を受ける。これから、より活発な研究活動を行うことができるように努めてゆきたい。

(楠美佳奈)

【近世史部会活動状況】

本年度の近世史部会は、博士課程前期三名・博士課程後期三名、特別研究生一名・特別研究員一名の計八名が在籍し、根岸茂夫先生、吉岡孝先生、佐藤孝之先生（東京大学史料編纂所教授）、大友一雄先生（国文学研究資料館教授）の演習・講義を

通じ、日々研鑽を積んでいる。

根岸先生は今年度サバティカルであるため、授業は受け持たれていないが、毎週行われるゼミ生の研究発表の場で、論文作成や学会での報告準備に関してご指導を頂いている。

今年度から新たに始まった吉岡先生の講義では、八王子千人同心の小島隆蔵が第二次長州征討時の将軍家茂進発に従軍した際の記録、「御進発御供日記」を使用し、同史料の翻刻・考察を持ち回りで言い、討論することで、当時の状況を分析している。

佐藤先生の演習は、昨年に続いて上野国山中領の山村地域の史料を読解し、近世期の山村における生活について理解を深めた。さらに夏期休暇中には、授業史料の該当地域である群馬県上野村にて古文書調査を行い、その調査史料を用いて後期に報告も行った。

大友先生の講義でも、昨年から引き続き、信濃国松代真田家文書の「公用方頭取日記」を使用し、九代藩主真田幸貫が幕府老中に就任した時期の真田家の職務や状況を、公用方の記録から検討した。

この他、夏の合宿を八月二十三～二十五日に長野県松本市で実施した。二十三・二十四日は各自の研究成果を報告し、二十五日には松本市文書館にて史料調査を行った。

本年度も所属院生が、国史学会や地方史研究協議会の卒業論文報告会、院生報告会など、学内外の学会で研究報告を行う機

会を得ることが出来た。また院生各自が研究を進め、論文の作成を行っているほか、外部の学会への参加といった活動・交流を通し、研究活動の益々の発展を図っている。

(齊藤みのり)

〔近現代史部会活動状況〕

本年度の近現代史部会は、博士課程三名、修士課程五名、特別研究生二名で、上山和雄先生、櫻井良樹先生、樋口秀実先生のご指導を受けている。演習では、各自の研究発表の他、角田敬三郎文書(國學院大學図書館所蔵)の輪読を行っている。

学外では、首都圏形成史の研究会に参加し、研究に生かすべく研鑽を積み、他大学の先生方や各分野で活躍されている様々なOB・OGの方々との交流を行った。また学内でも院生会の報告会に参加し、積極的な研究報告を行った。

また、恒例となった夏合宿では、修士論文の構想報告会を行うとともに、宮城県栗原市のくりはら田園鉄道公園・くりでんミュージアムと岩手県盛岡市の原敬記念館・盛岡先人記念館を訪れた。夏合宿では実際に赴いた現地の文化に触れ、また展示物の見学を通して、今後の研究に役立てることを目的としている。

栗原市のくりはら田園鉄道公園・くりでんミュージアムでは、本史部の卒業生に案内してもらった。くりはら田園鉄道という、細倉鉱山と町をつなぎ、鉱山の閉山とともに廃線となつてい

た鉄道の、実際に残された建物や車両、線路といった室内だけでなく野外展示も含めて興味深く見学した。盛岡市では原敬記念館・盛岡先人記念館を見学し、原敬を初めとする盛岡が生んだ偉人について改めて史料と展示で触れることができた。特にくりでんミュージアムは今年の四月に開館した博物館であり、近代史と切り離せないものの一つである鉄道と鉱山について考える上で日本の近代化を考える上での一助となると考えている。

以上、簡単にはあるが演習および夏合宿における活動について紹介した。今年度は政治史から軍事史、文化史や思想史とゼミ内においてテーマが多様である。そのため各々違う分野の視点から意見交換ができ、研究の視野が広がりやすい。今後も積極的に意見を交わし、多角的な研究を行いたい。

(山下春菜)

〔考古学部会活動報告〕

本年度の考古学コースには三つの演習が設けられており、谷口康浩先生(日本先史考古学)の演習には、博士課程前期二名・特別研究生一名、古谷毅先生(日本歴史考古学)の演習には、博士課程前期五名・博士課程後期二名、大貫静夫先生(中国考古学)の演習には、博士課程後期二名の計十二名が在籍している。

日本先史考古学を中心とした谷口先生の演習では、多様化する考古学研究の理論的立場と研究方法について理解を深めるた

め、テーマに沿った優れた研究論文を取り上げ、批評・討論を行っている。日本歴史考古学を中心とした古谷先生の演習では、古墳・歴史時代の研究史を、論文購読を通して御教授いただくと共に、各自の研究発表を通して討論が行われている。中国考古学を中心とした大貫先生の演習では、中国を中心とした東アジアの考古学を対象として、講義と各自の研究発表を通じた討議が行なわれている。

演習以外にも、複数の講義が開講されており、専攻生は自らの関心に基づき多方面からのアプローチが可能となっている。また、考古学関係の専門職員の養成を目的に開講されている「考古学実習A・B」の授業では、長期休暇を利用した発掘調査を通して、今日の遺跡発掘調査に必要な不可欠である高精度の測量機材や、科学的手法を用いた分析などを実践的に学んでいる。また、発掘調査を主体的に統括・運営するマネジメント力や、報告書作成の際に必要な発掘成果を統括する力なども学べ、発掘を総合的に捉える視野を養っている。

なお、今年度より埼玉県埋蔵文化財事業団とのインターンシップ協定が結ばれ、夏季休暇中に二名がインターンシップに参加した。行政発掘現場の管理・運営方法や調査員として必要な知識・技能を、実際の現場での作業を体験しながら学べ、専門職員養成に寄与している。

その他に課外活動として、学会での発表や論文発表、他大学の考古学専攻生との意見・知識の交換など、広い視野で自らの

研究を深める努力をしている。

(長嶋幹也)

【外国史部会活動報告】

本年度の外国史学コースは、東洋史を専攻する博士課程前期一名の計一名が在籍しており、金子修一先生のご指導の下、研究活動を行っている。

金子先生のゼミでは、漢文史料の読解力養成を目的として、唐・張九齡の『曲江集』巻八〜十二の「勅書」部分を白文から講読している。五名（うち一名が特別研究員、三名が聴講生）の受講者が順に条文を担当し、本文の校訂・訓読・訳注・史料に関わる考察を行っている。本年度で、『曲江集』を読み始めてから六年目となり、いよいよ最終である巻十二まで読み終える事ができた。『曲江集』の「勅書」を読み終えて、玄宗期の開元二十年代前半における唐王朝と、辺境に及ぶまでの周辺諸国との外交関係について理解を深める事ができたと感じる。『曲江集』の「勅書」を読み終えた後は、巻十三〜十四の「賀状」を新たに読み進める予定である。加えて、自主ゼミとして引き続き『曲江集』を巻十から再読し、巻十の前半部分の再検討は次号の『史学研究集録』にて発表する予定である。ご一読頂ければ幸いである。巻十の後半部分以降も随時発表していきたいと考えている。

また、東洋史の講義としては、学習院大学の鶴間和幸先生を

お迎えし、鶴間先生が現在ご執筆中の原稿をもとにして、古代中国にかつて存在した数多くの小規模国家の様相を、その独立性・経済力・外交術によって、小国が存続するための知恵や、また周辺国に及ぼした影響力はどのようなものだったのかを見ている。小国の観点から古代中国の動向を見ていく事ができるため、新たな発見が非常に多くあり、古代中国の趨勢を一新するような興味深い内容となっている。

その他学外の活動としては、それぞれに学外参加や研究活動を行っており、より質を高めた多くの研究成果を公表できるよう努力を重ねて参りたい。

(沼澤由貴)

【歴史地理部会活動状況】

歴史地理学では、毎週木曜日の六〜七時限目の時間帯にゼミを行っている。吉田敏弘教授の指導のもと、大学院生二名に加えて、歴史地理学ゼミの先輩方をお呼びし、各個人の研究発表を行い、意見を交換し、ひとりひとりの研究がよりよいものになるよう日々研鑽を積んでいる。

また、林和夫先生のゼミでは、明治期に日本を訪れた外国人の手記から当時の日本の景観を考えるという内容で、歴史地理学的な研究方法についてを学んでいる。

今年度は、國學院大學図書館所蔵那智参詣曼荼羅卷子本の復元を目標とした調査研究に、歴史地理学ゼミ一同で取り組んで

いる。この卷子本の調査は今まで数度行われてきたものである。そこで、今回の調査では、東京文化財研究所のご協力で、赤外線写真や蛍光X線写真といった特殊な撮影を行うことができ、新たな事実の発見を試みた。特にそのうちの赤外線写真によって、カラー写真や原本を用いた今までの調査では見えなかった紙の切断跡・加筆部分が可視化され、卷子本原本復元に関して大きなヒントを得ることが出来た。これらの詳細な調査結果については、現在報告書を作成中であり、今年度末に発行の予定となっている。

また、このほかに例年と同じく、岩手県一関市大東町の京津畑地区の現地調査・交流を行っている。同地区の近世の様子を復元するための聞き取り調査・日本で古くから行われてきている農法「冬水田んぼ」を実践した学習田での田植え／稲刈り体験・京津畑神楽の体験と、交流を中心に、大学のゼミならではのフィールドワークを学んでいる。

毎年二月を中心に不定期で行っている、井上荘から粉河東村（和歌山県紀の川市）の中世水利系統に関わる調査も、今年も継続して行っている。現地の方からの聞き取りを中心に、荘園絵図や文書に描かれている中世農村の姿の復元を試みているこの調査は、私たち大学院生兩名の研究テーマにとっても近いものであり、ここでの経験を自分自身の研究テーマへと活用していきたい。

(田中友貴)

【博物館学部会活動報告】

本年度の博物館学コースは、博士課程前期十七名、博士課程後期八名、特別研究生三名が在籍しており、青木豊先生による演習の他、鷹野光行先生（博物館史特論）、落合知子先生（博物館学専門実習）、矢島國雄先生（欧米博物館史特論）、栗原裕司先生（博物館関係法規特論）、駒見和夫先生（博物館教育活動特論）、井上洋一先生（博物館経営特論）、高橋信裕先生（展示工学特論）、原田一敏先生（博物館資料論特論AⅠ）、池田宏先生（博物館資料論特論AⅡ）、小川直之先生（博物館資料論特論BⅠ）、前川公秀先生（博物館資料論特論BⅡ）を講師に迎えるなど、充実した講師陣のもとで博物館学を幅広く学んでいる。また、これらの通常授業以外にも、国内博物館の学芸員や、中国・韓国から招聘した海外の研究者による特別講義も定期的に開催されている。

本コースでは、文部科学省「組織的な大学院教育改革推進プログラム」に採択された、「高度博物館学教育プログラム」の後継事業として、本年度より「醸造・蒸留博物館調査」に取り組んでいる。国内各地の醸造・蒸留博物館を、担当する都道府県ごとに分かれて調査を行い、各自が報告書を纏めた。現在、調査成果を『醸造・蒸留博物館事典』として発刊するため、編纂作業中である。

平成二十九年年度の博物館学専門実習は、八月十日～十六日まで秋田県横手市の雄物川郷土資料館において実施された。横手

市教育委員会の協力のもと、院生が主体となり「和鏡の文化史―黒曜石の鏡から魔鏡まで―」と題した特別展の展示作業を行った。今回の特別展に際しては、事前に展示構想からパネル類の作成までを準備し、現地で展示作業を行ったが、実習最終日の十六日には無事特別展の開催を迎えることができた。

本年は、本学の博物館学講座が開設六十周年の節目を迎え、これを記念し「博物館関係院友集いの会」が開かれる予定である。我々院生も、全国各地の博物館で活躍される院友学芸員に続くことができるよう、より一層研究に励みたい。

（池下寛人）

【美学美術部会活動報告】

本年度の美学・美術史コースは、博士課程前期六名、博士課程後期六名、特別研究生二名の計十四名が所属している。ゼミは、美学、西洋美術史、日本美術史の三専攻からなり、西村清和先生（美学）、小池寿子先生（西洋美術史）、藤澤紫先生（日本美術史）のご指導のもとに、日々研究を行っている。

美学美術史コースでは、美学における思想や概念、西洋美術史や日本美術史における絵画・工芸・音楽・舞台芸術などの文化と、研究分野が多岐にわたることからも研究の主体は個人にあり、研究に必要な資料の収集や作品調査など、フィールドワークも随時行っている。それらの研究成果は、各ゼミでの演習発表や、学会発表、論文投稿にて提示している。

また、月末には三つのゼミが集まる合同ゼミ、コロキウムにて研究発表を行っている。一度に発表する人数は一、二名で、一人あたりに十分な時間をとり、さまざまな分野に特化したゼミ生からの指摘や疑問を受けることで、発表者・質問者両者が相互影響するような、さらなる研究の発展を目指している。

講義においても、美学・美術史に携わる、第一線におられる方々を講師にお招きしており、各学生の専攻する分野の専門性を高めるとともに、専門外の分野も積極的に学ぶことができる環境にあるのが特徴的である。

以上のように、ゼミでの演習発表や各講義によって得られた成果・知識によって、今年度も、本学で開催された美学会全国大会などにおいて、学生が学会発表を行っている。さらに、学会発表に基づいた、学会誌への論文投稿も期待される。

学生の研究発展のため、美学・美術史コースのさらなる発展のためにも、今後も継続した積極的な研究態度が求められている。

(三宅香菜子)